

花

野に咲く命を野にあるように生ける
そのとき自然は花器となる
鳥の轉りも風のそよぎも
そして太陽ですら花器の一片となる

●草心流家元 板垣草心

伝統工芸館で、野草のディスプレイを見ました。生けてあるのは、道端でも見かける普通の野草。

栽培された花に比べると、野の花は小さく、色淡く、葉の間に見え隠れしています。心にゆとりがなければ、気づかずに通りすぎてしまいうな可憐な花。側に立つと、花の上をそよ風が微かに渡ってくるようです。傍らには、「草心流」と書かれた小さな立札がありました。

「草心流は、熊本の風土が生んだ花です。熊本の自然のおおらかさ、明るさ、風や太陽が似合う花なんです。昔から『生け花は足で生けよ』とい

かな口調で語ります。

板垣さんが、初めて花と出会ったのは二十一歳の時。僧侶としての修業先であった京都嵯峨野の大覚寺のこと。生け花は必修の一つでした。最初は、面映ゆい感じがした花でしたが、いったんその様式美に魅せられると、三年の修業期間はもっぱら花に打ち込む毎日になったといっています。「その頃の私にとって、京のみやびの薫る嵯峨流が全てでした。これ以上の美はないという思いで熊本に帰ると、ひたすら嵯峨流の普及に努めました。」

ところが、京都ではあれ程輝いていた花が熊本では光ってこない。しつくりしないのです。散々思い悩ん

うように、自然を師として、素材を自然の中に求めるのが原点——。

だ末、熊本と京都の風土の違いに気がつきました。京の花を熊本に持つて来ても仕方がない。熊本にはもつと熊本の風土に合った花があつて良いはずだ。自然の草花で熊本らしい花を創ろう。そうして、帰郷10年目にして生まれたのが草心流です。

「花は自然にあるとき、本当に美しい。しかし、その命を絶つことから生け花は始まります。だからこそ、花をやる者は花を切ることをのつらさを直視し、真剣に花に向かわなければなりません。自然にあった時以上に、美しく生けてあげなければ、花がかわいそうですからね。」

楚々とした野の花の、有りのままの風情が優しく心打つ草心流。板垣さんにとって本家の家元は、自然そのものであるかも知れません。



板垣草心

昭和十八年 熊本に生まれる。
昭和三十九年 京都大覚寺の華道芸術学院で嵯峨流を学ぶ。
昭和四十一年 帰熊。嵯峨流の教室を開設。
昭和五十一年 華道草心流を創流。

